

# 異聞風聞

編集委員  
まさのり 典  
すぎ 小杉

2020年7月12日 北海道新聞

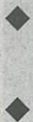
ほぼ100年前の1918〜21年、国内外で大流行したスペイン風邪に多くの文豪たちも感染した。

芥川龍之介は18年11月、友人への手紙に「今スペイン風邪で寝ています。熱があつて咳が出てはなはだ苦しい」と書いた。末尾に「胸中の風咳となりけり」の俳句。呼吸のたびにヒューヒューと音がする自身の病状をこがらしに例えた一句である。

与謝野晶子は男女12人の子どもを産んだが、18年は1人が小学校で感染したのをきっかけに、一家の大半がスペイン風邪にかかる事態に直面する。

この体験を同年11月に「感冒の床から」と題して新聞に寄稿。高熱、肺炎を招く感染拡大の速さに驚くとともに、大型呉服店や興行もの、学校など人の集まる場所の休業をなぜ命じなかったのかと政府の対応を批判している。

米騒動では5人以上集まって歩くのを禁じたが、感染では注意や警告の緩い姿勢と憤った。政府は昔も手を尽くせなかったようだ。緊急事態の解除後、再び東京を中心に新型コロナウイルスの感染者が増え始めている現状を晶子はどう見るか。



スペイン風邪では有効な治療法がないまま、3回の感染拡大の波があり、国内でおよそ39万人が命を落とした。新型コロナウイルス同様、スペイン風邪にも再感染があったようだ。回復したはずの芥川が再び感染したのは翌年2月。実家に戻り、半月ほど療養した。

今と比べると医療水準は低く、病原体も一種の細菌と考えられていた。

正体がようやくわかったのは20世紀も終わるころ。97年、アラスカの凍土に埋もれていたスペイン風邪の犠牲者の遺体から検体を採取。鳥インフルエ

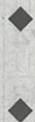
## 穴とし落む潜にさ適快

ンザに起源を持つウイルスの変異株であったことが判明した。

スペイン風邪は終息まで2年以上かかった。ワクチン開発の進展にもよるが、新型コロナウイルスも長期化する恐れがある。油断は禁物だ。

東土といえど2015年、フランスの研究チームがシベリアの3万年前の地層から増殖力の高い新種のウイルスを発見した。地球温暖化で永久凍土が解けた場所だ。

未知の病原体が解き放たれ、渡り鳥が運ぶかもしれない。新型コロナウイルスの起源がいまだにわからない中、不気味な話だ。九州や中部地方に激しい豪雨被害をもたらした温暖化、気候変動は感染症のリスクをも高めている。



山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授は「感染症と文明」（岩波新書）で病気の一つの解釈を紹介する。健康と病気は社会的なものを含む環境適応の尺度で、病気は環境に適応できていない状況を指す。変化が大きく、速度が速いほど不適応の幅も広がる。

狩猟から農耕定住になった結果、寄生虫疾患が増加、貯蔵食物を狙うネズミはノミやダニを通して感染症を持ち込んだ。うまく適応し心地よい環境と思っても足元では悲劇が始まっている。そんな歴史を教わった。

スペイン風邪と苦闘した与謝野晶子は「交通機関の発達で風邪までが世界的になった」と嘆いた。今やグローバル化で人の動く距離、量は飛躍的に拡大。世界の航空旅客数は年間44億人（18年）とこの十数年で倍増した。中国の経済成長も人々や商品の行き来を加速させた。地球規模で移動でき、商品も容易に手に入る。表向きは便利で快適な生活でも、気候変動を含めて思わぬ落とし穴が顔をのぞかせた。変化が激しすぎて不適合に陥ったのが今回の新型コロナウイルスの大流行だったのか。

東北大で薬学を学んだSF作家の瀬名秀明さんは「闘っている相手はパンデミック（世界的大流行）ではなく、現代社会だ」と唱えているが、胸に重く響く言葉である。